

[特集] 地域と育むSDGs

Sustainable Development Goals with Local Communities

日本の地域に「これからの暮らし方」の アイデアが隠れています

現在、社会を大きく変えるための道しるべとなっているSDGs（持続可能な開発目標）。消費者のSDGsやエンカルへの関心が高まる中で、企業では事業を通じた社会課題の解決を重要視する傾向が高まりをみせている。

ただ一方で、テーマが広く、具体的にどんなアクションから進めるべきか、どのような取り組みがSDGsに繋がるのかなど、重要性は感じつつ「何を？どこから？」始めればいいのか、まだまだ身近に感じづらい側面もあるだろう。

そこで、本特集では「日本の地域」にスポットを当て、伝統や文化、資源からなる地域のモノづくりやそのストーリーを取り上げることで日本ならではの多様性や持続可能性について、深掘りをしていく。

開催のお知らせ

■Ethical Style Fair (in 東京インターナショナル・ギフト・ショー秋2022)

テーマ：人・地域・環境に優しいモノづくり

日程：2022年9月7日～9日 / 場所：東京ビッグサイト東展示棟6ホール

■第32回グルメ&ダイニングスタイルショー秋2022

テーマ：食から始まるサステナブルライフの提案

日程：2022年9月7日～9日 / 場所：東京ビッグサイト東展示棟3ホール



1. 田植え体験の様子。八王子に酒米文化を根付かせたい、というものはちぶろの目標の一つだ
2. 諏訪五蔵の一つでもある諏訪の舞姫の醸造所前で社員と共に。一番左が(株)舞姫代表取締役も務める西仲鎌司氏
3. 高尾の天狗。八王子市内をはじめ、都内や近郊でも販売され、人気を集める

3

八王子の日本酒を造りたい 夢からスタートした地方創生の取り組み

八王子酒造りプロジェクト・(株)舞姫

「八王子市にはかつて豊富な地下水を利用した造り酒屋が約20軒ありました。しかし日本酒離れの影響や各蔵の事情もあり、2000年代から酒蔵の減少が続き、2012年には遂に市内から酒蔵醸造が消滅。また八王子市では実は古くから農業が盛んで、高月地区では今でも米作りが進められています。八王子の米で、八王子の酒蔵で、日本酒を造り、地元の人との交流や地域貢献につなげたい。そんな思いから2014年に八王子酒造りプロジェクト(はちぶろ)を始動しました」

そう語るのは、NPO法人はちぶろの代表理事の西仲鎌司氏だ。しかし「八王子の日本酒を造る」上では様々なハードルがあった。

日本酒を製造するためには国から発行される清酒製造免許が必要となるが、日本酒需要が減少する中で、需給調整・既存事業者保護のため、免許の新規発行は原則認められていない。そこで西仲氏は、縁あって知り合った長野県諏訪市の、100年以上続く酒造会社「舞姫」を買い取り、酒造りを開始した。

また「酒米作り」も難航した。高月地区では酒米を栽培している農家はおらず、プロジェクトに協力してくれる農家はなかなか現れなかった。西仲氏が何度も農家を訪問し、農作業も手伝い続けると、ついに一件の農家が協力を申し出てくれ、2015年に舞姫で、八王子の米で醸した「高尾の天狗」

をリリース。同年は2200本限定で販売したが、ふくよかや甘みの中に深いうまみを感じられる味が評判となり、約1カ月で完売。その後、協力農家も増え、生産量、販売量ともに伸び続けている。

はちぶろ・舞姫では、田植えや草刈り、稲刈り、蔵見学、そして3月には実際に醸造された新酒を飲みながら地域貢献活動にも意欲的に取り組む。八王子市の小中学校では「高尾の天狗」の製造工程で副産物として生じた米粉や酒かすを使った給食メニューも提供されている。

この2月には、舞姫は回転寿司「独楽寿司」を運営する(株)システム企画とコラボし、同社の契約農家の余剰米を活用したオリジナル日本酒「独楽純米酒」を独楽寿司全8店舗限定で提供。コロナ禍の影響で飲食店への米の卸出荷量が減少してしまつた農家を支援する取り組みだ。また多摩地区の創価大学や実践女子大学、拓殖大学等との産学連携の取り組みも進む。

はちぶろでは高月地区に酒蔵を中心とした「食のテーマパーク」の建設も計画。コロナ禍で計画は一時ストップしているが、西仲氏は新たに「街中」での都市型の醸造への挑戦も考えているという。酒造りを中心に、地域を活性化し、SDGs達成も追求する。そんな取り組みがこれからも続いていく。



1. バイナップルから生まれた商品群。県内のアロハシャツブランド「PAIKAJI(バイカジ)」とコラボしたアロハシャツも通気性が良いと評判だ
2. 「EIVISUジーンズ」とコラボしたレギュラーストレートフィットジーンズ
3. 生分解性のストローなども展開。「様々なアプローチで課題解決に取り組みたい」と同社

3

パイナップルの葉から抽出した繊維でジーンズやアロハシャツを 沖縄の名産品を活用し、環境課題に取り組む

(株)フードリボン

果実収穫後に廃棄されていたパイナップルの葉から抽出した繊維でジーンズやアロハシャツを生み出し、繊維抽出時に残る葉肉の残渣を生分解性プラスチックへと生まれかえらせる…そんな企業が沖縄県にある。

(株)フードリボンは2017年の創業。同社の沖縄での歩みは「シークワサープロジェクト」からスタートした。

沖縄県では年間約3600tのシークワサーが生産されており、9割が果汁、残りが青果として出荷されている。果汁を絞った後に残る果皮の部分は未利用のまま廃棄されていたが、同社はその果皮に着目した。

「シークワサーの産地として有名な大宜味村は長寿の村としても知られていますが、当社代表の宇田悦子が同村を訪れた際に、例えば食べ物一つでもできるだけ捨てることなく最後まで使い切る、そんな丁寧な暮らしに感銘を受けたと聞いています。そんな村で作られたシークワサーを余すことなく活用したいという思いからプロジェクトはスタートしました。シークワサーには「ノビレチン」や「タンゲレチン」といった機能性成分が含まれています。シークワサーを絞り、ジュースを作るだけではなく、その際に余った皮からアロマオイルを製造したり、粉末状にしてサプリメントや

キャンデーなどを製造・販売しています」(同社)

同社のシークワサー商品は好評。売り上げの一部は世界自然遺産登録への支援にも活用されていた。

また大宜味村の隣村である東村ではパイナップルの生産が盛んだが、同社はこのパイナップルにも注目。果実は食用として親しまれており、残った部分も家畜などのえさとして活用されているが、その葉は繊維質が多く、分解されにくい。肥料として活用するのも困難でこれまで捨てられていた。同社では、繊維質が多い性質を逆に利用し、パイナップルの葉から繊維を抽出、アパレル製品や生分解性ストローを生み出す取り組みを進める。

話題となったのが、昨年発売された日本発の世界的デニムブランドである「EIVISUジーンズ」とコラボしたジーンズだ。同商品はファッション業界でも注目を集め、高い評価を得た。

繊維を取り出す際に発生する残渣も無駄にしない。同社ではそこから生分解性のストローを開発。今後は、カトラリーなどの発売も予定している。環境にもやさしく、また生産者にも寄与する同社の取り組み。

同社では今後も様々なアプローチから地域が抱えている課題の解決に取り組んでいく考えだ。



1. ポップアップでイラストが飛び出す2021年版の「THE NEXT JOURNEY CALENDAR」。コロナが明け、心置きなく旅行を楽しめる日が来ることを願って作られたという。22年版も制作されており、どちらも税込2640円(以下同)
2. 粘着のり不要の静電ステッカー「Refit+」の「ウォールステッカー 海のいきもの」(1650円)も人気だ
3. PAPER VASE A。紙製の花瓶で、中には環境に優しい新素材LIMEXを用いた耐水性容器が入っている (3500円)



エンタメ系ソフトなどの印刷加工を通じ
持続可能な資源である「紙」の魅力伝え続ける

(株)一九堂印刷所

1910年創業の(株)一九堂印刷所。創業当初は印刷資材等を扱っていたが、1965年にアメリカから最先端のLPジャケット加工機を導入したことが、同社にとって大きな転機となった。その加工機を用いて、日本で初めて本格的に厚紙のレコードジャケットの製造を開始。その後も音楽・映像媒体の進化に対応して、LP、LD、CD、DVD、Bluray Discなどのエンターテインメント(エンタメ)系ソフトのパッケージ製造を進めてきた。1990年代中頃には、CDサイズの紙ジャケットも開発。その技術力の高さは海外企業・アーティストからも高く評価されており、「紙ジャケットブーム」の一翼を担った。

また同社は、紙のプロフェッショナルとして、環境に配慮した取り組みを進める企業としても知られている。例えば、従来のプラスチックトレイに変わり、環境に優しい紙製の「REPAK」もクライアントに提案している。トレイ自体に印刷も容易という特性も持ち、ベストアルバムなどの制作の際にはREPAKを指名するアーティストも少なくない。

「循環型社会の実現を目指し、紙100%にこだわって事業を進めてきました」と同社営業部長徳山和宏氏は語るが、同社は2004年には環境に関する国際規格であるISO14001を取得、翌2005年にはFSC®(森林管理協議会)のCOCC認証も取得しており、森林を守る取り組みにも積極的に参画している。

エンタメ系ソフトの印刷加工において業界から絶大な信頼を得ており、またその匠の技を評価した化粧品・菓子メーカー等からの受注も多い同社だが、環境への意識が高まり、持続可能な性質を持ち、かつ加工の自由度も高い「紙」に注目が集まる中で、近年では、セールス・プロモーション(SP)に関わる受注も増えているという。

また、同社では企画力と技術力を活かしてオリジナル商品の開発も進めており、2020年12月には専用のECサイト「一九堂ストア」もオープン。もともとは関係先等に配るノベルティとして企画製造していた「カレンダー」などが特に人気だ。

「BtoCビジネスを主軸と考えているわけではありませんが、こうした商品を知っていただき、触れていただくことで紙という持続可能な資源の可能性や魅力を伝えていけたらと考えています」(徳山部長)

エンタメ系ソフトの印刷可能なトップランナーとして新たな市場を開拓し需要を創造してきた同社は、SDGsへの意識が高まる中で、新たな市場開拓、需要創造を進めている。



1. エシカルバンブーの商品群。製造工程にもこだわっている
2. 無添加洗濯洗剤「バンブークリア」。飲んでも大丈夫なくらい安全だと言う
3. 竹の伐採風景。竹林の保全のため計画的に伐採を行う



里山の整備を目的として、竹繊維100%のタオルや
国産竹から生まれた洗剤の製造販売事業を展開

エシカルバンブー(株)

「山や森を整備することを目的にした、環境も資源も傷つけないものづくりを追求しています」そう語るのは山口県防府市に本社を構え、竹を原料とした商品の製造・販売を行うエシカルバンブー(株)の田澤恵津子社長だ。

田澤氏は「竹害問題」をきっかけとして「竹」に関わるようになった。竹害とは国内の竹産業の衰退が進む中で放置状態の竹林が増え、自然の生態系に影響を及ぼすことなどを指す。

大手企業各社で商品開発・PR戦略立案・実施に従事した後、フリーの商品企画プランナーとして活躍していた田澤氏はある時、クライアントからこの竹害について相談を受けたという。

竹について調べてみると、竹は成長が早く、抗菌性・消臭性も備えている。竹を資源にした商品を開発することで、様々な問題を解決できるのではないかと考えた田澤氏は2008年にクライアントとともに竹繊維の開発を開始。試行錯誤の末、2010年には竹繊維100%の完全自然循環型のタオル「竹のやわらかタオル」を開発した。肌触りもよく、吸水性も高い、また原料は竹100%で安心して使うことができるこのタオルはヒット商品となった。

このタオルのユーザーから「このタオルを安心して洗濯できる洗剤が欲しい」との要望を受けた田澤

氏は、今度は安全な洗剤についての調査をスタート。やがて竹炭と湧水だけを原料に環境に負荷をかけずに作られる「竹ミネラル」と、それを開発した防府市の伊藤緑地建設の会社を知り、同社を訪れた。同社の伊藤清志社長は高齢のため事業をやめることを考えていた。

伊藤氏から話を聞き、また竹ミネラルを原料とした洗剤を実際試してみても、その品質や安全性に感銘を受けた田澤氏は、伊藤氏の提案もあってその製造事業を継承。2016年に防府市にエシカルバンブー(株)と製造工場を設立し、2017年から竹ミネラルの製造を開始した。

現在、同社では竹から作られたタオルや竹炭・竹炭灰・湧水だけを原材料とした無添加洗濯洗剤「バンブークリア」などに加え、国産竹から生まれた天然アウトドアスプレー「バンブーミスト」などを製造・販売している。冒頭の言葉通り、同社の事業の特徴は山や森の整備を目的にしている点にある。

「山口県の竹を葉から根まで全部使って、廃棄物も排水も一切出さないモノづくりを徹底。竹製品を作る際には、里山の保全のために必要な資源量を計算し、必要な分を超えそうになったら伐採・生産をストップしています。未来に向けて資源を残していくことがこれからのものづくりの重要だと考えています」

その社名の通り、同社はエシカルなものづくりを追求し続けている。



1. イベント会場の様子。壁や間仕切りがなく、見通しがよく一体感のある空間となっている
2. 今回初となるグリーン企画、大小様々なフラワー・観葉植物が並び
3. 食のもったいないに向き合う、PASS THE BATONの食料品店



日本の企業が抱える“もったいない”や“困りごと”に向き合い、デッドストックや規格外品に新たな価値を見出すマーケット

PASS THE BATON / (株)スマイルズ

(株)スマイルズでは、2022年4月16日(土)〜17日(日)まで、企業やブランドの倉庫に眠っていた規格外品やデッドストックアイテムを集めたマーケット「PASS THE BATON MARKET VOL.7」(以下PTBマーケット)を東京品川の「コクヨ東京品川オフィス THE CAMPUS」で開催。

『日本の倉庫を空っぽにしよう』を合言葉に、ファッション・インテリア・食に関連する全53ブランドが日本各地から参加し、来場者は様々な地域のモノづくりとその背景に触れられる2日間となった。

PASS THE BATONについて

「PASS THE BATON」(以下同ブランド)は、2009年より展開していた実店舗での取り組みから始まる。個人の思い出の品や愛用していたが必要としなくなったものを『次の持ち主に渡す(バトンを渡す)』をコンセプトにスタート。個人から集めた品物に、前の持ち主のストーリーや思い出を添えることで、より魅力的なモノとして生まれ変わらせる新しいコンセプトのリサイクルショップだ。生産国・大きさ・商品のジャンル・値段など、それぞれ異なる特徴とストーリーをもつ品物が集まるため、同ブランドでは、1つ1つスタッフが対面でヒアリング

を行い、魅力付けをすることで、いわゆる従来のリサイクルショップのような在り方ではなく、独自の世界観を作り出し、同ブランドに共感してくれるファン(出品者・消費者)を獲得していった。

PTBマーケット開催の経緯

「2019年にブランドとして10年目を迎え、改めて世の中を見渡した時、個人単位のリサイクルは浸透してきたと感じた。一方で、企業やブランドが抱えていた規格外品や何かしらの理由で商流から外れた商品に対し、ものづくりの一端を担う立場として課題意識を感じていた。ただ、店舗のスケール感で向き合うには難しいと感じ、そこで店舗の枠を超えて、企業やブランドが抱える『もったいない』や『困りごと』に向き合い、世の中に紹介する場としてPTBマーケットが本格的に始動した」と同社事務局の担当者は語る。

同ブランドの実店舗は、ファンに惜しまれつつも、2021年に東京(表参道店・丸の内店)、2022年3月付けで京都(京都祇園店)を閉店。近年SDGsやサステナブルへの関心が高まり、企業やブランドの変革が求められる中、同ブランドは、企業と消費者両方が、生産と消費について、気軽に交流できる場としてPTBマーケットの開催に踏み切った。

今回の開催について

開催7回目を迎える今回は、新たな顔ぶれとなる28のブランドを含む、全53ブランドが出演。会場1階のフロアには、ファッション・インテリアに関連したブランドが展開され、厳しい検品基準から外されてしまった食器、履くのに支障がない小さな傷が付いた靴、流行やトレンドにより廃盤となった洋服、サンプリ品のアクセサリなど、様々な理由で、行き場を失っていたものの、魅力的で価値のある商品が並んだ。また、会場2階には、全国各地から集まった食のブランドが立ち並び、同社の目利きでセレクトした『パスザバトンの食料品店』では、賞味

期限が近いが、まだまだおいしい食品やパッケージや包材に傷はあるが、中身の味・品質には自信があるモノなどが並び、商品の売り買いだけではなく、生産者と対面してじっくり話せる、PTBマーケットならではのフラットな交流の場となっていた。

「メーカーのモノづくりへのこだわりや厳しい検査基準から、やむを得ず発生してしまうモノがある。PTBマーケットで、抱えている倉庫を空っぽにすれば、メーカーは新たなモノづくりに挑戦できる、思い切った生産も行うことができる。」と同社事務局の担当者は語る。

また、今回初となる「グリーン企画」には、新たに「SOLSO FARM」



▲東京発のシューズブランド「RFW」。検品で外された、履くには支障がない小さな傷がある靴を販売



▲那須の新銘菓「バターのいとこ」。既存商品の製造時に出る「生地の端」を焼き上げたアイデア商品を販売



▲持続可能性がテーマのデザインスタジオPh.D.。靴下の製造時に出る糸くずを中材に利用したクッションを販売



▲広島県にあるチョコレートメーカー「USHIO CHOCOLATL」。割れってしまった板のチョコレートを販売

「FLOWERS NEST」 「TOKIRO」が初出演。神奈川県川崎市にある自然体験型農園「SOLSO FARM」は、観葉植物やハーブなど、こころでしか出会えない珍しい植物も展開。多肉植物の専門店「TOKIRO」は、多肉植物に初めて触れる人も楽しめる寄せ植え体験を実施し、来場者は、色とりどりの花と植物に、見て、触れて、体感できる企画となった。会場1階のワークショップエリアでは、「giraffe」と「ミタケボタン」によるネクタイ生地を使ったくるみボタンづくりや、「靴下屋」によるソックスアニマルづくり、ココヨによる再生プラスチックを使った定規づくりなど、子供から大人まで楽しめる体験型のワークショップも開催した。

「モノ好きである私たちとしても、もっと面白いものを見たい。日本全国の企業・ブランドの皆様、一緒に倉庫を空っぽにして、新たなものづくりに挑戦していきましょう。」と同社事務局担当者は語る。企業が抱える『もったいない』、困りごと』という切り口から新たな価値を提案する同ブランドの取り組みは、これからの日本のものづくりの生産と消費の役割と、新たな消費の選択肢を追求するという面でも、ギフト・流通業界が注目すべき取り組みと言えるだろう。

(今回のPTBマーケットは、2022年7月16日、17日にコクヨ東京品川オフィス THE CAMPUSにて開催予定。)



GOOD ETHICAL OFFICE。
随所にエシカルデザインの取り組みが見られる

空間創造事業のトップランナーが追求する エシカルデザインと未来にやさしい空間

(株) 船場



大規模商業施設を中心に、空間創造事業をグローバルに展開する(株)船場。同社では循環する社会の構築を目指す取り組みに力を入れており、2021年からはETHICAL DESIGN (エシカルデザイン)を提唱。その実現に向けて様々な取り組みを進めている。

同社が提唱するエシカルデザインは、単に自然環境に配慮したデザインというだけではない。

「多様性への配慮や少子高齢化対応のエコシステムの再生、ICT・AIといった先端テクノロジーの実装など、空間創造を通じて様々な社会課題を解決し、持続可能な循環の仕組みで未来を共創していくというのが私たちが挑戦するエシカルデザインです」(同社執行役員 エシカルデザイン本部長、ゼロウェイスト推進室長 神戸氏)とのことで、まさに持続可能な未来を目指す取り組みでもある。

また同社では「SUCCESS PARTNER」という企業理念をベースに2022年〜2024年の「中期経営計画2024」において「未



▲同社執行役員でエシカルデザイン本部長ゼロウェイスト推進室長の神戸氏

来にやさしい空間を」というミッションと「GOOD ETHICAL COMPANY」のあいうえおの仲間たち」というビジョンを策定している。

本社オフィスリニューアルでもエシカルデザインを具現化

同社の取り組みの一例が、資源循環型リノベーションサービス「CIRCULAR RENOVATION™」の提供。小誌2021年6月号で詳述の(株)ナカダイ・(株)モノファクトリーと業務提携し、スタートした取り組みで、資材の調達から内装施工時に排出される産業廃棄物の削減と再資源化を一元管理するサービスだ。

リノベーションを行う際の素材の選定や、発生する産業廃棄物について重点的に分別を強化することにより、廃棄物そのものの削減とリサイクル率の向上を実現し、施工時だけでなく、施工前後のCO2削減を狙いとする。デザイン・コンストラクションの双方からアプローチする「6R (リターン/リユース/リサイクル/リセレクト/リデザイン/リノベイト)」を実行するビジネスサービスとして提供が進む。

具体例が、船場本社の全面リニューアル「GOOD ETHICAL OFFICE」だ。同社ではコロナ禍以前の20

19年から働き方改革としてテレワークの促進を進めており、2021年3月には「第1回TOKYOテレワークアワード」で大賞を受賞しているが、この働き方改革推進に伴い、2020年12月に東京港区の本社オフィスを2フロアから1フロアに集約。オフィスで仕事をすることに新しい価値を創出するために本社のリニューアル工事を実施している。

このリニューアル工事では、従来の並列型固定席のオフィスに、ABW (アクティブペースドワーキング) が導入された。

またエシカルデザインという観点で見ると、リニューアル前のオフィスで使用していたデスクや机などの什器や備品、使用済みのマテリアルサンプルや現場工事で使わなくなったカラーコーンの廃材などをリサイクル、リユースしたリ、ファニチャーやアート作品と



▲GOOD ETHICAL OFFICEは8つのゾーンから構成。写真は「丘」。デスクを積み重ねて構築



▲マテリアルの情報をストックする「マテリアル」のゾーン

してアップサイクルし配置した。

既存家具の約80%を転用し、廃棄量とコストの大幅削減にも成功している。例えば、ABWへのシフトにより大幅に廃棄される予定だったデスクを積み重ねて作った小上がりの「丘」のエリアや使わなくなった備品やディスプレイ、サンプルなどの廃材で作ったアート作品などは圧巻だ。

まさに「隗より始めよ」を体現した取り組みと言えるだろう。なお、この「GOOD ETHICAL OFFICE」は日本空間デザイン賞2021でサステナブル空間賞も受賞している。

エシカルデザインによる家具を学生レジデンスに実装

エシカルデザインを取り入れた一例が、東急不動産(株)の学生レジデンス「キャンパスヴィレッジ大坂近大前」のプロジェクトにおいて



▲キャンパスヴィレッジ大坂近大前の1階ラウンジ。随所にエシカルデザインのオリジナル家具が配される

て、オリジナル家具を実装した取り組みだ。

具体的には【1】岐阜県飛騨市を拠点とする(株)飛騨の森でクマは踊るの協力のもと、飛騨の広葉樹を活用した家具を製作。既存の木材流通では家具になりにくい部分をあえてデザインとして生かすことで、森林資源に新たな価値を与え、森林の持続可能な循環を促進。例えば、薪用として流通するはずだったシユリザクラの大きな塊を利用した切り株テーブルや、トチの木の枝分かれ部分を脚に使ったテーブルなどを配している。

【2】(株)モノファクトリー協力のもと、本来の役割を終えて廃棄されてしまうモノを資源として活用する「アップサイクル家具」を製作。例えば工事現場で使用していたケールドラムの丸テーブルなどを共用部に配置している。

さらに【3】1階の共用空間全体をバーチャルギャラリー化し、



▲国産木や廃材を使ったテーブル。素材の特徴をデザインとして活かしている

【1】【2】の家具が完成するまでの背景やストーリーを掲示した。入居者や来訪者が資源循環に触れ、学ぶ機会も提供する取り組みだ。取り組みにあたっては、同社プロジェクトメンバーと東急不動産(株)の担当者が実際に飛騨市を訪れた。森林や製作所で学ぶことも多かったという。

この二例に限らず、エシカルデザイン推進の取り組みは着実に進んでいる。

「様々な企業様がそれぞれ課題を抱えていらっしゃると思います。エシカルデザインに取り組む中で、つながり、協業することで解決の糸口が見えてくるケースが多いと実感しています。我々は空間創造事業を行なっていますので、様々な企業様とも関わりを持ちうる企業だと考えておりますし、今後も様々な企業の皆様とともに、課題解決に取り組んでいきたいと思っております」(神戸氏)

食から始まるサステナブルライフの提案

第32回グルメ&ダイニングスタイルショー秋2022のテーマは「食から始まるサステナブルライフの提案」。ここでは「食」に関わる人と環境に優しいアイテムと企業をご紹介します。



国産野菜をエシカルな取組みで作った野菜だしパック



マウンテンブック (同) norle

商品名 野菜だけのやさしい旨みだし

国産の規格外の野菜や通常廃棄する軸や石づきを生産者から買取り、皮や芯も余すことなく6種類の野菜だけを丸ごと使用した「だしパック」。食材ロス削減に繋がるエシカルな取組みから作られている。食品添加物不使用で、野菜の旨味を引き出し香りが高いのが特徴。

<https://www.norle.co.jp/>



サステナブルな食糧供給に向け、近年、高い注目が寄せられる昆虫食！



(株) オールコセイ

商品名 ツイストスティック

原材料には国産のコオロギを使用。農業残渣や食品残渣を餌に利用するなどフードロスにも貢献。コオロギは昔から食べられていた伝統食材として栄養価が高く、また、家畜よりも温室効果ガスの排出量も少ないため、環境に優しい「未来食」として注目されている。

<https://allkosei.co.jp/>

暮らしに関わるエシカルなアイテム

第94回東京ギフト・ショー秋2022 Ethical Style Fair は、「人・地域・環境に優しいモノづくり」をテーマに開催。ここでは「暮らし」に関わるエシカルなライフスタイルを実現するアイテムと企業をご紹介します。



廃棄される宇治抹茶に新たな価値を、優しく繊細なお茶の印香



INCENSE KITCHEN

商品名 いとをかし香【抹茶】

製造段階で、食品として販売できなくなった宇治抹茶を再利用した印香。人工香料はもちろん、抹茶以外の天然香料も使用していない優しく香り立つお香。日本の伝統模様や宇治にちなんだものを象った木型で型抜きをしており、愛らしい形も魅力的。

<https://incensekitchen.com/>



野生動物のイノチを余すことなく生かしたジビエレザーのスマートケース



MAKAMI

商品名 2Wayスマートケース

害獣として捕獲・処分された野生動物の革を余すことなく生かすという想いで、生まれたブランド。ジビエレザーのスマートケースは、L字のファスナーを開き取り出しもスムーズで、名刺サイズにも対応している機能性の高いデザイン。

<https://www.makami.jp>



素材を余すことなく使用！地球環境に配慮した手詰めモナカ



(株) 鯛さち

商品名 厳選素材の鯛あんモナカ

地元宮城で地場産原料を吟味した、「小倉・味噌・ずんだ」の自家製餡と鯛の形が特徴のモナカ。秘伝豆100%のずんだ餡は、製造過程で取り除かれる薄皮も捨てずに製餡。また生産量をコントロールし、フードロスにも取り組む。食べるたびに「サクッ」とした香ばしさが楽しめる。

<https://taikich-sendai.stores.jp/>



世界初！廃棄されるりんごの花びらを活用 透き通る薄紅色のりんごジャム



企業組合JT&Associates

商品名 天然淡雪りんご花びらジャム

日本最大のりんご産地、青森県。風とともに消えていたりんごの花びらに新しい命を。研究の末、新しい農産物として長期保存が可能となりました。まるで宝石のような美しい色合いのジャムは、たちまち広がるりんごの優しい香りと甘さが楽しめます。

<http://www.aoi-jam.jp/>



人にも環境にも優しい、竹繊維100%のタオル



エシカルバンブー (株)

商品名 竹のやわらかミニバスタオル

日本の竹から抽出した、竹繊維100%からなるタオル。シルクのような肌触りが特徴で、肌触り・防臭性・吸収力に優れ、赤ちゃんから敏感肌の人まで、どんな人でも安全安心に使える。また、使用後に土に埋めれば土に還る完全自然循環型のタオルとなっている。

<https://ethicalbamboo.com>



再生紙を循環させるハリコから開発された、新素材のディスプレイ仕器



(株) キイヤ

商品名 ハリコボード

ファッション業界などで使われるポティを、ハリコ（張り子紙を使用した製法）で製造するメーカーによる小仕器。使用済みの梱包材や古紙などを集めた再生紙を使用しており、使用後も、トルソや仕器の材料として再利用することができるエコ素材。

<https://www.kiia.co.jp>